

金沢

かわら版

13

尾張町「こせ通り」で

「こせ通り」だと知っているわけだ。そういえば、かつては結婚式にしても冠婚葬祭や近所の者が集まり、「高砂や」この浦船に「と自前の船を披露して祝

たり。運動会などは、尾張町の商店街だけでクラウンドを借り切るほど。不幸があれば、すぐお茶屋で世話をしあったり。

町を歩けば、行く人ごとにあいさしを交わすが商人のたしなみ。

「おやま、へ出掛けるか」金沢の町へ出ることを近郊の古者たちは諷めて言う。このおやま、は、かつての一向一揆の当時の線本山「おやま御坊」のことであり、前田利家以降は金沢城のことを指す。そして石垣下で闘いする尾張町界隈(かいわい)のにきわいをも指している。

尾張町の商人は、こうした人の「こせ」を忘れずに闘い(闘きない)することだわりを残している。

(石野 環) 尾張町若手会

だんさん

「こせ料亭の女将(おかみ)の言葉に、時代の変化が聞こえる。せつかくの宴会や」というのも、朝日の時間を気にしたり、「祝儀の額をチマチマと計算してみたり。そりゃ法律的には社長であっても、阿書(あづか)の他は普通の勤め人と同じだからだろらか。

一方、お大原(たいじん)さんは大風(おおふう)で細かいことに「こせ」じゃないもの。心付けの出し方一つとっても、財布ごと預けたりするといったように器量(けいりやう)の大きさが違う。

遊ぶにしても、自分の得意な義太夫や清元なんかの藝を持っていて、そのおはご藝が済まない芸妓(げいぎ)の山番(やまばん)がなかったものだ。時間が夜の十時や十一時になるのは当たり前。

そのかわり、今度の地震のようなことがあったりすると、大変(たいげん)ある、と優しい気持ちで来てくれたり。表に見える細かい形ではなく、見えない部分での大木(おき)のおもとの庇(ひさし)を大切にする。一番大事(だいじ)な財産(ざん)は、人の



茶屋街

以前はお茶屋が軒を連ね、にぎやかだったが、現在は数軒となった